

谷川〈たにがわ〉の大工屋敷〈だいくやしき〉（山南町）

谷川の七区の内にある清水家は、ほとんど大工を職として、その技術が大へんすぐれ、主〈おも〉に神社やお寺などの建築〈けんちく〉をしております。宮大工として、その名がたかく、ついに、大工屋敷の名が生れるようになったといわれています。古いお宮や、お寺の棟〈むね〉にある札〈ふだ〉に、その名がよく書きのこされています。

その初代の清水左近〈さこん〉さんは、享保〈きょうほう〉の頃の人で、左近さんに次のようなことが、つたえられています。三人の兄弟が、お伊勢まいりの途中〈とちゅう〉、滋賀県〈しがけん〉びわ湖〈こ〉の瀬田川〈せたがわ〉まで、きたところ、その時にちょうど瀬田の唐橋〈からはし〉をかける工事がおこなわれておりました。

大勢〈おおぜい〉の大工さんたちが、さかんに仕事をしていました。同業〈どうぎょう〉のことで、ちょっと見て行こうと、立ちどまって其の仕事ぶりをじっと見ていましたが、「橋の反〈そり〉」を造ることで大へん苦心〈くしん〉していたらしく、なかなか工事がはかどりません。どうしてかけるかと、三人はなおもしんけんにながめていました。三人はその仕事ぶりを見て、おかしくなったので、

「アハハハハ。」と、大声で笑ってしまいました。その笑声を聞いた大工さんたちは、「なぜ笑うのか。」と、とがめたので、そのわけを話したところ、「橋の反〈そり〉が思うようにならないので苦心しています。できれば教えていただきたい。」と申しました。

そこで三人は、さっそく引きうけました。しかし、

「私たちは、いまお伊勢まいりの途中ですので、ひとまずお伊勢まいりをすませて、帰りに立よりますから。」と約束しました。

お伊勢まいりをしてかえる途中〈とちゅう〉、細引〈ほそびき〉（細いつな）を買ってきて再び瀬田に入りました。

先づ瀬田川の岸から岸へ細引を渡〈わた〉し、ひものたるみをはかり、それをくわしく図面〈ずめん〉に書き上げました。

でき上がった図面にもとづいて、いよいよ工事をすすめました。行きずまっていた橋の工事が、急に活気づき、ついに、りっぱな瀬田の唐橋ができ上り、瀬田川に優美〈ゆうび〉な橋の姿をうつすようになったといわれています。

その時に、りっぱな技術を非常にほめられ、三人の兄弟はそれぞれ、左近〈さこん〉、右近〈うこん〉、求馬〈もとめ〉の名をいただき、衣類を拝領〈はいりょう〉しました。

